

作品タイトル「フリージャズみたいにいきたい」

著者名 くろいわゆうり

あらずじ 私は「堅実的な」人間だった。ただ「堅実的過ぎる」がゆえ、自分を変えなかった。職業をかえてその「堅実さ」から抜け出したと思ってもうまくいかない。そんな折、ある出来事によって私は新しい自分になるチャンスを得るが…。

文字数 4675

(1)

私は人から良く「堅実だ」と言われる。いや、「堅実過ぎる」と。自身でも、幼少期からそういう自覚はある。林間学校の肝試しや修学旅行への参加を頑なに拒み続け、「冒険心が欠如している」と三者面談の際、担任に注意喚起されていた。そして、そういう性格は一向に改善されなかった。中堅大学に入学すると、二年の始まり頃から企業研究をはじめた。で、一流と二流の間の企業に内定を得た。将来のキャリアプランを考え、性格的にはあまり合うとは思えなかったが、営業課を希望した。数年後、それまでの堅実な営業成績が評価され、人事部に移動した。会社の中核として堅実に機能した。私は絶対的に必要な人材ではなかったものの、実際いなくなったらそれなりに困る社員になった。そうした私にもある時期、遅まきながらの「反抗期」がおとずれた。人生の一大転機だと、某新聞社が主催する「作詞講座」を受講した。幼少期はピアノを習っていたし、ずっと音楽鑑賞が趣味だし、ひそかに音楽関連の仕事に就きたいとずっと思っていた。そして、卒業制作として行われた某有名アイドルの、次期シングルカップリング曲の作詞コンペで「最優秀賞」を獲得した。クリエイターとしての道を切り開いた。

その後、同窓会などに行けば、旧友たちから、

「堅実なお前が、そんな道に進むとは驚きだ」

と称賛とも蔑みとも取れぬ感想を数多くもらった。そんな周囲の反応を尻目に、私は新しい人間に生まれ変わった気でいた。ところが、だ。業界内で私はすぐに「堅実な作詞家」というレッテルを貼られることとなった。確かに私が、「まったく変わっていない」という兆候は、旧友たちとの再会の際すでにあった。

「これから、印税が入ってくるんだろ。この場合は全部、お前が支払えー」

と周囲に唆されても私は割り勘に拘った。その堅実さは、もはや浴槽に長年こびりついたカビのように取り除くことは不可能だった。私は「堅実」という名のルールをはみ出したわけではなかった。別の「堅実」という名のルールに乗り換えた状態だった。

それでも私は狂気を身に纏い、破天荒になりたかった。だから、ある仕事を引き受けた際、それまでの作詞スタイルを変え、自動筆記やカットアップを駆使して前衛的な詩を作り上げた。しかしそれは、あっけなくプロデューサーに却下された。

「仕事熱心だね」

としごく感心されて。そう、私は「前衛風」の詩とともに、お馴染みの「堅実な」詩をいくつか書いた上、5、6作品を同時に提出したのだ。「前衛」を押し通す強引さなど持ち合わせていない。私はどこまでも「堅実」だった。

(2)

ある日。私は仕上げたばかりの作品を携え依頼主であるレコード会社のプロデューサーの自宅を訪問した。同学年、同じ世田谷区民とは到底思えぬ「堅実」の「け」の字もない豪華な邸宅だった。三角と丸い球体がくっ付いた屋根。その下に、四角の箱と円錐の筒が二つ重なりあった、まるで子供がテキトウに積み木を並べたような不思議な外観だった。全体はシルバーマテリアックで染め上げられていた。太陽が燦々と輝いている日は反射した光が遠く富士山の麓まで届く、と家主である細山田三郎は自慢げに語っていた。

ただ外観の無機質さに比べると、内部は二階にウッドデッキがあったり、木と正調の床だったりと温もり溢れる木材がふんだんに使用されていた。趣味の良い家具に充たされた一階リビングで背もたれのない丸イスに座る。背もたれの方、廉価なものではない。背もたれがなくとも高級なイスなのだ。東南向きという部屋にやわらかな陽光が差し込んでいた。

さっそく私は鞆から茶封筒を取り出した。中の紙の枚数を確認すると、細山田はすぐに封筒にしまった。テーブルの脇に置く。

「中、見なくて、良いのか?」

「俺は、お前に全幅の信頼を寄せてるから」

「私が、堅美だから、か？」

私は自嘲気味に訊ねた。

「まあ、そういうことだ。それがお前のウリだもんな！ハハハ」

「そんなことはない。私は、自分の作品がまったく好きになれない」

「まあ、そんなもんだ」

細山田は赤ワインのグラスを空に掲げた。一人で乾杯をする。

「私はもつと狂気に満ちていたい」

「ハハハ。それはどだい無理な話だ。狂気を持ち得る人間っていうのは、間違ってもそんなことを口にしないからな。自覚がないからこそその狂気なわけだ」

私はひたすら苦笑いだ。

要件が早々に済むと、奥さんの華麗な手料理をこちそうになった。

「そろそろ、龍一を迎えに行かないと」

食後のデザートを頬張っていると、奥さんが赤ら顔をした彼の肩を叩いた。どうやら子供のお迎え時間らしい。

「じゃあ、そろそろ辞去しよう」

私はそそくさと席を立つ。

「お前も来い」

細山田が私のシャツの襟を引つ張る。安物のシャツだ。そんなにおもいつきり引つ張ると破けてしまうのではないか！

「いや、帰るよ」

「どうせ、暇だろ」

「…」

「何か、素晴らしいイメージーションが生まれるかもしれないぜ」

この仕事に就くようになってからというもの、人から何処かへ誘われる際こういった「クリエイティブの足しになるだろ」的なことを良く言われる。しかし実際、そんな都合の良い展開があるはずもない。

(3)

近所の幼稚園はいたってオーソドックスだった。狭い運動場、適度にうらびれた

園内、ところ構わず走り回る園児たち。細山田は慣れた足取りで息子の教室へと向かっていく。てつきり名門私立にでも通わせているのだと思っていた。

「甘いな、お前は。もちろん俺は息子を名門私立に通わせられるほどの収入がある。しかし、自分の子供を幼稚園からそういう【セレブ組】にするのは早過ぎるんだなあ」

私はその疑念を口にするといったん歩を止め彼は彼の教育思想を語った。それから間もなく、

「あれ、あれ！　もしかして、その顔は俺が名門私立に通わせられないとも思ってるわけ?!」

と叫んだ。

「話を真剣に聞いているだけだろ」

と、彼は私の顔を一瞥した後、腰につけた本草の高価そうなポーチをがざごそはじめた。ほら、ほら、ほら、ほら。

「なんだ、これ?」

「俺の自宅の施工費の内訳」

見るとそこには、仮設工事、基礎工事、屋根工事、板金工事、諸経費、等の豪邸にかかった工事費用とその内訳がっらっら羅列してあった。その額は私の日常から遠くかけ離れていた。いや、遠くかけ離れ過ぎていた。だから驚くことさえできなかった。

「どうだ。坪単価で言うと、世田谷の数多の邸宅の中でも、かなりの上位にランクインだ」

「なるほど。分かった」

「分かったなら、よろしい」

彼は帽子を取るマネをして敬礼をした。そして踵を返した。それまでまともだったのだが、自身の富豪振りに酔ったらしい。ふらふら蛇行した足取りになる。私は小さくため息を吐いた。

ふいに横を見ると、からっぽの教室にぼつんと佇むピアノが私の目に飛び込んできた。吸い込まれるように中に入った。

夕日が差し込み赤く染まる室内。そして、その入り口からもっとも奥まったところにピアノはあった。古めかしいアップライトだ。椅子に腰かける。痛んだスプリングが尻にぐわんぐわんと振動を伝えてきた。試しに鍵盤に触れると、ウワワワーンと死者の嘆きのような音。完全に調律が狂っている。ピアノ全体をざっと点検したところ、響板、親板、ピン板、様々な箇所故障が散見できた。ただ、ピアノの調律というのはその道のプロが行っても数週間ないし数か月かかる、非常に緻密な作業だ。私のような素人が迂闊に手を出すわけにはいかない。しかしその惨状を見て、音楽に携わる者として何もやらないというわけにもいかない。

取りあえず応急処置をするため、前面を開いた。それから、チューニングハンマー代わりに、ジッポライターの金属部分をチューニングピンに万遍なく叩きつけた。続いて、油代わりに自らの頬油を指で掬い取った。同じく万遍なくピンに塗りつける。再び鍵盤に触れると、先ほどとは比べものにならないほどクリアな音になった。それから、スリーコードを使うだけの曲を試走してみたが、指が追いつかなかった。しかし久しぶりのピアノ演奏の興奮から私は、そのつたない指さばきが生む独特の「間」がうまい具合にアクセントとなり、とんでもない名演奏をしているような感覚に陥った。いつのまにか瞳を閉じ、完全に自分の世界に入り込んでいた。

「モンターン！」

意味のない奇声を上げる。その瞬間、ただの幼稚園の一室が名門ジャズクラブ「ヴィレッジヴィンガード」へと変わった。私は興に乗りまくった。ライク・ア「ビル・エヴァンス」な前傾姿勢を取る。ひたすら鍵盤と会話をした。何を弾いているのか自分でもまったく分からなかったが、ラストはG7からCへとコードチェンジをして、無事演奏を終えた私は鍵盤から指を外し、ゆっくりと目を開いた。

すると、目の前にエプロン姿の女性が立っていた。おそらくこの先生だろう。顔を見ると目が真っ赤に腫れ上がっていた。頬には滴が絶えず流れていた。

「本当に素晴らしい演奏でした。私は幼少期からずっとクラシックピアノを習っていたんです。だから、ピアノソナタとかはキレイに演奏できるんです。だけど今みたいな、あつ、ジャズのことなんて、全然分らないんですけど、ジャズの曲をまさにジャズらしく弾くことができないんです。先ほどのあなたの奏法、高音域を弾く時、肘を動かす動作とかが、私はできないんです。先生に、『高音域に移動する時

は、肘じゃなくて、指を動かせ』って、散々教え込まれてきたから、金縛りにあったみたいに畏まった音しか出せないんです。そう、ジャズ特有の壊れたっていうか、潰れたっていうか、あの強烈な音が出せないんです。きつと根が真面目なんです。ジャズは真面目な人間じゃ弾けないっていうのが、私の持論です」

声を震わせながら、これ以上ないほど私を褒めたたえてくれた。こんなに褒められたのは人生初だった。

「いや…褒めすぎですよ」

と言いつつ、満更でもない私は自然と頬が緩んだ。

「きつと破天荒な生き方をしてきた方なんですよね？」

「え、いや、私は私の道をただ突き進んできただけです。時には直感的な選択で大失敗をしたこともあります。それも人生」

「凄いです。本当に…」

「ありがとうございます。【人生はフリージャズ】それが、私の座右の銘です」

私の中の何かが変わった気がした。漲る自信が心や体に溢れだした。

「なんだ、こんなところにいたのか」

するとそこに細山田と龍一君があらわれた。

「部外者が何やってんだ。帰るぞ」

「あ、ああ」

「…あなたは園児のパパではないんですか？」

ハンカチで目元を拭いながら女性が言った。

「ですね。すみません…。彼の連れです」

「そうなんですね…初対面の方にこんなこと聞くなんて失礼ですが…。独身ですか？」

「はい。その手のことに疎くて」

「良かったら…連絡先交換してくださいませんか？」

女性が頬を赤らめつつ私の目を見つめた。私も同じく見つめた。そして数秒間が
あいた後、

「とてもありがたいご提案なのですが…先ほど会ったばかりの方と連絡先を交換するのは抵抗があります…。もう少し会話、お互いの趣味趣向について共有できたらと思います。そこで類似点があれば交換しましょう。もちろんまずは友達から

スタートです」

すると女性の涙がすうっと引いた。ハンカチをエプロンの前ポケットに粗雑にしまった。それから、真顔というかそれを超越した能面のような顔になって、すたすたと歩きだしそのまま外へ出て行ってしまった。

室内には静寂がおとずれて、そのうち細山田の甲高い笑い声が響いた。(了)